

【創作】

## 3本の寓話

増田辰良

創作

## 3本の寓話

増田辰良

## 目次

1. 真夜中の本棚
2. 二羽のスズメ
3. 蜘蛛日記  
付記

## 1. 真夜中の本棚

この家の主人は大学の教授である。論文の執筆作業が真夜にまで及ぶとき、苛々<sup>いらいら</sup>が募り<sup>つ</sup>便意をもよおすことがある。この夜も便座に尻を下ろし、しばし考える人になる。この固まった姿勢に疲れ、うな垂れた顔を傾げ、斜め左前にある本棚を見上げた。この本棚は、家を新築するときに、壁に埋め込んで設<sup>け</sup>たものである。というのも趣味の物書きが嵩じて蔵書は増える一方で、その置き場所に苦慮していたからである。場所が場所だけに、棟梁も驚いてはいたが、おもしろがった。しかし、女房からは「紙に臭いが染み込む」と、猛反対された。が、主人は何度も冷静に論すよう説得した。

「すでに読み終えたもの、買い置きした資料的な文庫や新書を並べ、

ここからは持ち出さないから」

女房は怖い目をして「絶対に、持ち出さないでくださいね」と念を押してから、しぶしぶ了解した。

さらに主人は「常に芳香剤を置いてあるので、着く前に臭いは緩和されるだろ、気にしなさんな」と、首を竦<sup>く</sup>めて言い足した。

というわけで幅八〇cm、高さ一八〇cm、一〇段の本棚が設置された。およそ八〇冊の本たちがぎゅうぎゅう詰めにされている。この本たちの顔ぶれはほとんど変わらない。主人は用をたす間、その背表紙を眺めつつ、こうした本たちの心境を探ってみた。

サ シクシクシク。

源 ああ。また始まったあ。『サハリン島』さんかい？

落 何でえ何でえ。また、目ん玉からしょっぱい水を流してんのかよう。シクシクで三十六回、泣けば気が済むのかあ。へっへっへっ。サ もう！ いじわるねー。『古典落語』さんはいつもダジャレでちやかすんだから。シクシク。

源 『古典落語』さん。からかちやいけませんよ。相手は泣いているの

\*キーワード…寓話、本棚、スズメ、蜘蛛。

だから。『サハリン島』さん。今夜は、どうしたの？

サ だって、だって、私は二十年以上ここにいるけど、一度もお役  
に立ったことがないのよ。これじゃあ本当の流刑地だわ。見てよ、  
背表紙もこんなに綺麗なまま。『源氏物語』さんも同じでしょ。き  
っと、チエーホフも嘆いているわ。

源 見て、と言われても段が違うから見えないわ。でも、またその  
愚痴。それは昨夜も、その前の夜も、またその前の前の夜も、ず  
っと聞いてあげてきたじゃない。だからね、言っただけでしょ。  
私たちは背表紙が綺麗なままでも、この棚に並んでいるだけで価値  
があるのよ。いるだけで意味があるの。

落 そりゃあ、そういうわけだ。

源 『古典落語』さんも、この五段目について価値があるのよ。

落 おいおい、源氏さんより。俺はとっくの昔に真打だぜ。へっへっ  
へっ。

源 あらそうだったの？ ふん。本を部屋の飾り物、インテリアの  
一部と考えている人もいるみたいよ。だから並んでいるだけでも見  
栄えが良くなって、十分に価値があるの。ましてや無味乾燥なトイ  
レの壁に本棚を設けて知識の詰まった私たちを並べるなんてセンス  
いいじゃない、ここのご主人。

サ シクシク。それは痩せ我慢というものでしょ。本当の価値じゃな  
いでしょ。シクシク。『源氏物語』さんは、このままでいいの？

源 私はこれで納得しているわ。ご主人にとっては価値があるのだか  
ら。本も人も同じだと思うのよねえ。どんな本も人も存在するだけ  
で意味がある、価値があるのよ。そもそも役に立たないものなんて  
ないんじゃないかな。毎日、ご主人はここにやってくるのだから、  
愚痴ってばかりいないで『サハリン島』さんも手に取ってもらえるよ

うラブラブ光線を発射しまくればいいのよ。六日前の夜、覚えてい  
るでしょ。二段目の『モーパッサン短編集』全三冊を手にとって真  
剣な顔付きでページを捲つてたじゃない。羨ましくて嫉妬しちゃっ  
たあ。

サ それに満足したのかしら？ 暢気ねえ。『モーパッサン短編集』  
さんは爆睡中よ。

文 今夜も下々が五月蠅ねえ。ラブラブ光線を発射しようが媚を売ろ  
うが、『サハリン島』さん、あなたには価値がない。ここにいる意  
味もない。だから手に取ってもらえないんだよ。運命として諦めな。  
そうすりゃあ、気も楽になる。ここは価値のないものにとっちゃあ、  
まさに流刑地さ。

源 その声は『文章読本』さんね。じゃあ、『文章読本』さん自身に  
は価値があるとも言いたいなの？

文 あるよあるよ、おおありだあ！ 見てくれ！つて言っても、下の  
段から八段目は見えないか。俺なんか、これ、付箋を貼ってもらっ  
てるし、アンダーラインも引いてもらってるんだ。ご主人は俺が必  
要だから貼ったり、ラインを引いてくれたのさ。

活 それは、ちよつと違うんじゃないかな？ 本というものはすべて  
が読まれるのではなくて、資料として何か調べものをするためにペ  
ラペラと捲られるだけでも、ご主人には貢献していると思うけど。  
手元に持っている本の中に自分が探している情報があるかどうか、  
を確認できるわけだから。他人が書いた本の背表紙のタイトルだけ  
を見て、アイディアが浮かび創作意欲の湧く作家もいるみたいだし。  
源 あらら。始めて聞く声ねえ。誰かしら？ 初めまして、私は五段  
目にいる『源氏物語』ですけどお。

活 ああ。こちらこそ、初めまして。最上段の十段目の端っこにいる

『活字のサーカス』です。つい口をはさんでしまいました。

源 私、『活字のサーカス』さんの考えに賛成だわ。私も一度も手に取ってもらったことがないし、何度かラブラブ光線を発射したこともあるけど、全然、こつちを向いてくれなかったわ。んんっ。でもね、ご主人は何か情報を得るときに必要なだから私たちを買い揃えてくれたはずよ。

文 そっかなあ。『源氏物語』さん。飾り物や資料としてのみ並べられてるんじゃないや……。たとえば付箋やラインとまではいかなくても、やはり本は読まれて何ぼのものでしょ。文字は読まれて初めて文字になるんじゃないの。多くの人に読んで欲しいでしょ？

ト 『文章読本』さん。それを言うなら、今夜は宣言させてもらうけど、この本棚の中できつと私の価値が一番高いはずよ。

文 誰？ あなた？

ト はい。一段目にいる『トイレ文化』考です。

文 何故、一番高いの？

ト だってね。私なんかご主人に読んでもらってから、この棚に並べられたのだけど、その後、誕生されたお二人の息子さんたちにも読んでもらったのよ。あれは、ご長男が小学二年生、ご次男さんが小学三年生のときだったわ。まだ、ちっちゃなちっちゃな手で私をここから抜き取ってくれたの。ああ、あの温もりを今も感じるわ。お二人は便座に座って用をたしながら毎日、数ページずつ私を丁寧に捲って読み上げてくれたのよ。偉いよねえ。二カ月もかけてね。だから見て、この背表紙を見てよ。ほらほら、ボロボロでしょ。この棚で三人の家族に読んでもらったのは私だけね。ふっふっふっ。文 『トイレ文化』考』さん！ それはすごいよ。だってあなたの書名は見れば、幼い子供たちでも文字さえ読めれば手に取るもの。ト

イレにトイレのことを書いた本があるんだもの。それにあなた一段目にいるでしょ。一段目にいるってことは便座に座ると、子どもの目線にあるよね。きつとお子さんたちに読ませようと、ご主人が意図的にあなたを並べたのよ。

落 そうでえ、そうでえ。『文章読本』さんに賛成！ あつしみたいな落語本はよう、趣味がなけりゃあ、手にも取ってもらえないのよう。シャレの解せないヤツにはよう。くっくくく。泣けてくらあ。

残 それにしても毎夜、毎夜、真夜中になると騒ぐねえ。どんなに価値があろうが、いずれはおしゃかにされちゃうよ、俺たちは。古本屋じゃあ、もうこんな老いぼれの文庫や新書は買い取ってくれやしないからな。町内会の資源回収日にビニールヒモできつく縛られ、それも最悪の場合だと小雨のしとしと降る日に道路端に捨て置かれるんだあ。あ、想像しただけでもブルブルときて、心臓によくないよ。その後は切り刻まれて融かされ、別の物に変身させられちゃう。俺たちはそんな運命のもとに生まれてきたんだあ。諦めろ。

活 あら、その声は……。名は体を表すって言うけど、『日本残酷物語』さんの頭はやはり残酷なことしか考えないのねえ。そうでもないわよ、残酷さん。先日、ご主人と帰省中の次男さんとの会話が聞こえてきたけど、きつと次男さんが私たちを引取ってくれて、まだまだ利用してくれるわよ。読書家なんだよ、次男さんは。東京にある偏差値の高い大学の文学部生だし、図書館司書の資格も取得中よ。今は書店でアルバイトをしているから本には詳しいし、優しいし、丁寧に扱ってくれるし、親切だよ。安心してましょ。ずっとここにいられるから、きつとね。

文 いや、それはどうかなあ。『活字のサーカス』さん。ご主人と次

男さんの興味の範囲が違うから……。ばいと捨てられ、別の本と入れ替えられちゃうかもしれないよ。

活 『文章読本』さん！ そんな、ネガティブな考え方じゃあ、駄目でしょうが。『日本残酷物語』さんが言うように融かされちゃうよ。ト せめて近所にある小学校や中学校の図書室へ寄贈して欲しいよ。いつも子供たちと一緒にいられるもの。公立の図書館でもいいんだけど。

源 そうねえ、『トイレ文化』考さん。

活 公立は駄目みたい。職員さんが仕分けをしたり、ラベルを貼る業務が増えるからって、受け入れ自体を断られるそうよ。

源 そんなこともあるかねえ。そういえば、ご主人が同人誌を公立の図書館三十数館へ献本したのだけど、そのうち三館からしか礼状がもらえなかったって、嘆いてたっけ。真心が伝わらないなんて残酷よね。

残 おお、俺かい？ この図書館も新刊本を購入する予算は潤沢じゃないし、減らされている館もあるようだけど、いざ献本するというと嫌がるんだな、これが。

サ やっぱ、資源回収に出されるのがオチかなあ。融かされちゃうのかあ。

源 そんなことないって！ ずっとここにいられるって。『サハリン島』さん。ご主人はまだ現役で専門の研究論文を執筆しているから、私たちを読む時間がないのよ。私なんか十巻ものだから、読み切るにはたくさん時間がないとねえ。歳をとると読書の範囲も変わるし、退職されれば、時間に余裕ができて、きつと手に取ってくれるってえ。先日私たちを見つめて、時間に余裕ができれば読むぞ”って独言を囁いてくれたもの。ねえ『古典落語』さんも聞いたよね。

#### (四)

落 おお、聞いた、聞いた。この耳の穴をかつぽじって確かに聞いたぜえ。『トイレ文化』考さん聞いたはずだぜい。

ト ああ、そうそう、そのことなら私も聞きましたよ。

サ じゃあ、初めに戻るけど、この本棚にいる私たちは一体全体どんな価値があるのよ！ 結論が出せないじゃあない！

残 『サハリン島』さんよう、不用になれば、ウンチのように流されるって。軽いもんだ俺たちは。ここはそんな場所じゃないか。流「軽」地だあ。はい、それまでええよ。

落 お後がよろしいようで。へっへっへっ。

源 ああ。『日本残酷物語』さん！ 『古典落語』さんも！ 黙って！ シーシー。ご主人が私たちを見つめているわよ。静かにして、シー。ほら、『サハリン島』さん、しっかりラブラブ光線を発射しなさい。頑張れ！ シー。

この夜も用をたし終えた主人はしばらく本棚と向かい合い、その背表紙を最上段から順に下へと一冊ごとに熱い眼差しを向けた。その中でもとりわけ電灯の光を反射している書籍を抜き取り、目次を開いた。その書籍は『君たちはどう生きるか』だった。(了)

## 2. 二羽のスズメ

— ある庭で二羽(AとB)のスズメが話をしています。

A ぼくは、どこか遠くへ行ってみたいなあ。毎日、この庭でエサを拾って食べたり、ネコにおっかけられる生活には飽き飽きしてき

たよ。人間からはチュンチュンがうるさい、とどなられることもあるし。秋には案山子<sup>かし</sup>にもおどされるしね。おじいちゃんになる前に一度でいいから、うーんと遠くへ旅をしてみたい。海の向こうにある国へ行ってみたいなあ。そのためにはもう少し大きくて強い羽が必要のだけど。生まれ変わることもできないし。他の鳥に変身できればいいのだけなあ。あゝあ。

そうかい？ ぼくはここでの生活に満足しているよ。苦勞しなくてもエサは手に入るし、ネコともじゃれあえるからね。この庭を離れるなんて想像したこともないよ。大きな羽をもった他の鳥にあこがれたこともない。平凡な今のままが一番いいよ。極樂極樂！

どこからか風がさつと庭を吹きぬけた。そして風の神が現れた。

風神

そこにいるスズメたちよ。私は風神こと、風の神である。こう見えても、私は一度だけであればどんな願いもかなえられる神通力を持っているのだよ。じゅっと、おまえたちの話を聞いていたが、Aスズメ、お前はこの庭を離れ、うーんと遠くまで旅をしてみたいそうだな。

A

そうです。このままおじいちゃんにはなりたくないのです。別の世界をこの眼で見たいのです。

風神

そうか。ならば、願いをかなえてやろう。お前が望む別の鳥にしてやろう。さあ、お前になりたい鳥の名前をしゃべるがよい。

A

えっ？ そんなことができるの？

風神

なんと言つても、わしは風の神じゃからの。ふつつつつ。だつ、だつたら、お願いします。ぜひ、ツバメにしてください、なりたいです。

風神

ツバメだと？ んっ？ もつと大きくて強い羽を持ち、どこまでも飛び続けられる鳥がよいのではないのか？ 遠くへ行きたいのだから？ 誰にも負けないような強い鳥になりたいのではないのか？

A

いいえ、ぼくはツバメになりたいのです。空を切るように飛ぶ、あの華麗な羽さばきにあこがれています。チュリーチュリー、ピリリッって啼く声も好きです。毎年、海を渡り何千キロも旅して南の島からやってきては軒下に巣を造り、子育てをします。そして帰って行きます。とほうもなく長い旅を繰り返しています。人間が出入りする軒下に巣を造るのはカラスや猫から身を守るためです。ツバメは人間を敵とせず、人間に守られて子育てをします。優しい心がある人のところにツバメは帰ってきます。人間たちからは、昔からツバメが巣を作ると、「縁起がいい」「商売が繁盛する」「幸せを運んでくる」と慕われています。事実、若い稲穂につく虫を食べて、人間の役にも立っています。大型の鳥であればたくさんエサを食べなければなりません。それを探すのも一苦勞です。やはり、あの燕尾服<sup>えんびふく</sup>を着ているスマートなツバメになりたいです。

風神

ツバメについて、少しは知っているようだが、ツバメはここからはるか遠い海を越えたところにある島から渡ってくるのだぞ。来る途中、帰る途中、他の鳥に襲われたり、大時化<sup>おおしげ</sup>で飛び続けることもできず、そのまま命を落とすこともあるそうだ。生きて、この庭に帰ってくるできないこともある。それでもよいのか？ 何かを決心するということは、単に始まりにすぎないことだぞ。解っているのか？

A

はい、どんなことがあろうと耐えてみせます。自分で決めたこ

とですから。

風神

そうか。解った。それほどまでに固い決心をしているのであれば、すぐにツバメに変身させてやろう。ちょうど、この街や庭にいるツバメたちは、来週にはここを離れ、南へ帰る頃だから。よいか。え〜いい、え〜いい。チチンプイプイ、ツバメになあれ！ ツバメになって飛んでゆけ！ 飛んでゆけ！ パチパチ、パチーン、チチンノプイプイ。ハイっときた！ どっこいしょ！

――

風神がへんてこな呪文をとなえると、Aスズメは、胸は白く、ど元はえんじ色の真新しいツバメに変身し、不器用に羽を動かして仲間の群れへと飛び込みました。

風神

さて、Bスズメよ。お前はこのままでよいのかな？

B

はい、風神さま。ぼくは、今の生活に大満足をしています。楽チンチンです。このままで十分です。身体も丈夫ではありませんので、危険をおかしてまで何かを見たり、体験したいとは思いません。この庭がぼくの世界そのものです。

風神

そうか。よく解った。若いくせに人生を悟ったような物言いだな。

――

そういうと風神の姿は霧のように掻き消えた。

数日後、ツバメとなったAスズメは他の仲間たちと南の島をめざして飛び立ちました。そして一年後、若い稲穂に虫がつく頃、南の島からたくさんのツバメがこの街に帰ってきました。この庭にも帰ってきました。チュリーチュリー、ピリリッ、チュリーチュリー、ピリリッ。その中にかつてのAスズメもいました。スリムな身体に

燕尾服がピタットとフィットし、骨太のたくましい姿をしています。どうやらお嫁さんを連れて帰ってきたようです。懐かしく、庭の上を飛び遊んでいるかと思えば、空中アクロバットで田んぼの虫を捕っています。

お嫁さんとはとても働きもので、さっそく巣造りをする場所を探しはじめました。どうやら夫婦は稲藁をしまう納屋の軒下に巣を造るようです。ここであれば、人間がしょっちゅう出入りするので、大嫌いなネコやカラスなどに襲われることもないからです。夫婦は忙しく、巣造りをはじめました。巣の真下やその周辺には、人間が運ぶとき稲藁に残っていたものが落ちるのでしよう。糞がころがっています。泥と枯草を唾液で固めて巣を造っていると、スズメたちが糞を拾いにきました。その中にあるBスズメもいました。ツバメとなったAスズメはすぐにBスズメに気づきました。そして声をかけました。チュリーチュリー、ピリリッ、チュリーチュリー、ピリリッ。

A

やあ、一年ぶりだね。Bスズメくん。元気だったかい？ チュリーチュリー、ピリリッ。

B

あゝあ、確かあゝあ、その声はAスズメくんじゃないかい？ 帰ってきたんだね。前とはすっかり様子が変わって見分けがつかないよ。元気そうだね。(BスズメはAスズメが凛々しく、その身体がバネのようにたくましくなっていることや、また可愛いお嫁さんをつれていることにも気づきました。)

A

二日前に、この街へ帰ってきて、仲間たちはそれぞれ生まれた家へ分かれていったのだよ。ぼくのお嫁さんは、この家の玄関と軒の間にあった巣で生まれ育ったんだ。だから僕もいっしょにここへ帰ってきたのさ。(AスズメはBスズメの毛並みが煤けて、眼

は淀み、虚弱な身体のままであること、さらにお嫁さんもないことに気づいていました。)

B 巢造りの休憩をするとき、南の島のことを教えてくれないかな？  
話してよ。

A そうだね。いいよ。ぼくもここを出た後のこの街や庭での出来事を聞きたいよ。

B この街や庭での生活は何にも変わらないよ。毎日、チュンチュンさ。

— お嫁さんのツバメは休むことなく、せっせと巢造りにはげんでいます。なぜならツバメたちは四月から七月までの間が産卵期で、最初の繁殖がうまくいかなければ、その後二回目の産卵をし、雛を育てることもあるからです。

A さてと、何から話そうかな？ 何を聞きたい？ チュリーチュリー、ピリリッ。

B そうだねえ、じゃあ、ツバメが冬を越すための南の島ってどのあたりにあるの？

A 近くは台湾とかフィリピンかな。遠いと、ボルネオ島の北部、マレー半島、ジャワ島まで行くよ。その島は日本と違って、とても暑いんだ。まるで太陽の熱は生き物を蒸し焼きにするような感じだよ。そこへたどり着くことも至難の業で、ねえ。台風や雨や風に打たれると、つばさがもぎ取られるような痛みを感じるんだ。そんなときは、ツバメなんかになるんじゃないかって数え切れなくらい後悔したこともあったよ。でもねえ、心配ないよ。仲間たちが集団の真ん中にぼくをおいて強風や雨を避ける壁をつくってくれるんだ。賢い仲間たちは南へ向うタンカーや漁船に乗

せてもらって、体力をたくわえるものもあるよ。

B 一気に台湾とかジャワっていう島まで飛ぶのかい？ 若鳥には大変なことのように思えるけど。

A うまく季節風に乗れば、かなり楽に飛び続けられるけど、そうでないときは小さな島を順番に飛び渡って行くんだよ。渡った島でエサを食べたり、水を飲んだりして体力を回復させるのさ。

B 大型の鳥に襲われることもあるんだろ？ 恐くないのかい？

A もちろん、恐いさ。でも、そんなときには仲間が集団をつくって、固まって飛ぶんだ。しかし、集団からはぐれてしまつて、大型の鳥に食べられてしまう仲間たちもたくさんいるよ。ぼくたちは協力し合つてはじめて命を守ることができるのさ。

B でも、ここに住んでいたときよりも体格がずい分と立派になったね。燕尾服もすっかり板についているよ。一年前まで、スズメだったとは思えない雰囲気だよ。

A そうかい。ありがとう。雨や風にも負けないよう羽を動かし続けたので筋力がついたのさ。ここを出て南へ向つたときは筋力や体力がなくて、仲間について行くことができず、ずいぶん迷惑をかけたけど。そのとき一番親切してくれたのが、あのお嫁さんだよ。うちとけあつて話しをしていたら偶然、この家で一緒にいたことが分かったんだよ。それで仲良くなったのさ。

B お嫁さんがいるなんて、うらやましいよ。ところで南の島じゃあ、色んな鳥がいるんだろ。

A もちろんいるよ。この街では見たこともない鳥ばかりだよ。例えば、アカフサゴシキドリは「ズリリ、ビービビ」ってセミのように鳴くよ。モモグロヒメハヤブサは君と同じくらいの大きさで世界でも一番小さなハヤブサだよ。みかけると恐いけどね。でも

ね、君の仲間のスズメたちもいるよ。君たちよりも身体が少し大きいけど。はじめて知ったことだけど、ぼくらのような野鳥ばかりが売られている市場もあるんだ。カゴに入れられた仲間たちをみると気の毒で嫌な気分になるけど。自由を奪われているから。人間に買われていくそうだよ。もつとびっくりすることはヘビやトカゲ、それにカエルがバカでかいことだよ。トカゲは長さが1mもあるんだ。初めてみたときは恐竜だあ！つてさけんじゃたよ。とても暑いところだから、食物は一生不自由しないくらいたくさんあるんだ。だから食欲おおせいな動物は、身体がずんずん大きくなるようだね。

B でも人間の言葉はどうなの？ 理解できるのかい？

A いくつも違ったものがあつて、この街の人たちとはまったく違う言葉だよ。聴くことはできても何をしゃべっているのかは、理解できないよ。顔の色もみんな日焼けして黒いんだ。逆に、浜辺の砂はとても白くてきれいだよ。

B す・な。すなつて何？

A ああ。君は海を見たことがないよね。海と陸の境に石が波によって細かく砕かれ、それが積もっている地面を頭に浮かべればいいかな。その砂の中には踏むとキュキュと音をだす砂もあるんだ。「鳴き砂」って呼んでるよ。それからね、空から見下ろすサンゴ礁もとてもきれいだよ。これが果てしなく続く海もあるんだ。

B さんごしよう？

A 海の中に咲いているお花畑って言えばいいかな。あの美しさは口では説明できないよ。実物を見てくれるといいけど？ 感動しちゃうよ、きつと。

(ふつと顔を上げ) ああ、もう行かなくなつちゃ。お嫁さんにばか

り巣造りさせちゃいけない、いけない。じゃあ、つづきは明日にしようね。チュリーチュリー、ピリリッ、チュリーチュリー、ピリリッ。

― BスズメはAスズメの話聞きながら、自分とは住む世界が違うというふう感じた。わずか一年でAスズメは新しい知恵や知識を身につけ、身体もとてもたくましくなつて帰ってきた。Bスズメは一年前のAスズメの勇氣ある決断をうらやましく感じざるをえませんでした。そして、急に自分がとても小さな小さな存在でしかないように思え、寂しくなつてきました。そのとき、どこからか風がさつと吹きぬけました。すると、あの風神が現れました。

風神 どうした、Bスズメよ。Aスズメのことがうらやましくなつたのか？

B はい、風神様。Aスズメはとても立派になりました。この庭にいては得られない知恵や知識を身につけました。自分とは別世界のスズメ、いえツバメになりました。自分は一年前にした決断をととても恥ずかしく思います。後悔もしています。お願いです。風神様。どうか、ぼくもツバメに変身させてください。冒險をして、すなやさんごしようというものをこの眼で見てみたいです。

風神

何を言う。Bスズメよ。お前はお前自身の一生を生きればよいのだ。うらやましく思うことはない。今を一生懸命、生きればよいのだ。Aスズメも旅の途中で今を懸命に生きようと努めたはずだ。それがあのたくましい身体をつくつたのだ。お前は後悔しているかもしれない。自分もツバメになることを望めばよ

B

風神

かったと。なあ、B スズメよ。夢の実現を不可能にするものが  
たった一つだけあるのだが、それが何であるか分かる？  
……？

それは失敗するのではないかという心の恐れだ。その恐れに打ち勝てば、どんなことも実現できるであろう。

『不可能という言葉の反対語は挑戦だよ』。

挑戦すれば、知識や知恵なんでものは後からどうにでもなる。

大事ななのは知識や知恵じゃない。ただ立ち止まっているだけじゃなくて、進もうとする強い意志があるかどうかが大事なのだ。しかし、私にはもう神通力はない。聞き忘れたのか。あのとき、「一度だけ」と言っただけだ。すべてをA スズメに与えてしまったのだよ。とてもとても残念だ。(了)

### 3. 蜘蛛日記

初日。

―― まったく、よく降るぜ。畑に水が溜まって、ここ二週間ばかり乾いた土を見ていない。大根の葉っぱは瑞々しくなったが、捨てられた白株しろかぶの葉っぱは、この雨ですっかり腐り、土と化してしまった。この雨降りだ、獲物がやって来るわけないよな？

「あれ、いつの間に、こんな所に蜘蛛が網を掛けたのだろう。昨日の夕方にはなかったよな。気がつかなかったら、頭に網がひっかかるところだったよ。どこにいろのだ。蜘蛛は？ どこだ？」

―― おっと、畑のご主人様が大根、白株、枝豆、ピーマンや茄子の顔色を窺いに來たぜ。毎日、飽きもせず、朝夕、欠かさず来るからねえ。でも、この畑の野菜たちは幸せものだよな。ご主人様に話しかけられるように覗き込んでもらって、その成長を見守ってくれているんだから。それに茄子やピーマンの葉っぱを喰ってるという虫まで退治してくれるんだから、感謝、感謝だよな。

「なるほど、ここは風の通りがいいので網を掛けたのだな。さすがだ、生き物は賢いなあ。でも風が直通なので網、持ち堪えるかな？ 最近、強い風の吹く日が多いから」

―― そう、俺はピーマンの支柱である竹竿とブロック塀沿いにある雪柳の小枝とを繋いで陣地を作ったのさ。季節は秋だ。この畑には竹竿の天辺を停留地にするトンボがたくさんやって来る。季節はずれのモンシロ蝶やアゲハ蝶も来る。さらに桃色のムクゲや淡紫色したシュウメイギクの可憐な花の蜜を求めてミツバチもやって来る。これらの旬な獲物を狙っているのさ。

「どこにいろのだ。ふつうは網の中央部分にいろのだがな？ 雪柳の小枝かな。おとう！ ここにいたか。煤けて竹竿と同じ体色をしているので気がつかなかったよ。煤けてないか、きつとこれがオリジナル、天然色なのだろう。それにしてもデカイな。女房に見せたら、卒倒しそうだ。いや蜘蛛なので、くも膜下出血でもおこしそうなくらいびっくりするだろう、なくんちゃって。手の親指の爪くらいはあるぞ。こいつ、学術名では何んて呼ばれてるのかなあ？」

「ご主人様は俺の顔やら頭やら、手足などじつくりと観察し始めた。まるで舐めるような目つきである。嫌だなあ。そんなに近く顔を寄せるなよ。口が臭いよ。加齢臭っぽい匂いもするよ。離れてくれ、そんなに視るなつてば。恥ずかしいよ。」

「それにしても不細工な敵つい顔だな。ごつごつしているよ。目ん玉とか口はどこに付いているのかな。うずくまってるから視え難いなあ」

「視るなつて！ 視られるから余計、うずくまってしまうのだよ。離れてくれ！ 卒倒させるぞ！ くも膜下出血で再起不能にしてやろうかあ？」

「こんなに毎日、雨が降るのによく網、張ったよな。いつ張ったのかな」  
「運命なんです。運命。網張らないと喰いつばぐれるのですよ。生きられないの！ 分かんないかなあ？」

「でも、上手な張り方じゃないなあ。網目が大きすぎるなあ。こんなのでトンボ、捕れるのか？」

「初めてなんです、網張ったのは、初陣なのよ。黙って見逃してくれよ。それより離れてくれ。この一瞬の晴れ間にも獲物が来るかもしれないのだから。そこに立っていられたら、獲物が来ないよ。ああ！ 美味そうなアゲハがスルーしたじゃないか。邪魔なのよね。頼む、離れてくれ。」

「よし、決めた。これから毎日、観察してやろう。朝夕だ」

「止めてくれ。見世物じゃない。ペットじゃない。来なくてもいい。野菜だけ観て帰ればいいじゃないですか？ 俺は一人で生きていけるのだから。心配はご無用ですよ。観察なんてしないでくださいよ。夏休みの課題研究じゃないんだから。」

二日目。

「おお、今朝は傘をさしておいでなすったか。ご苦労様です。大根、着実に成長してますよ。いつも上から目線で見てますけど、だいぶ大根らしい葉っぱになってきましたね。」

「おお、いるな。昨日と同じ位置、同じように頭を上に出しているな。この不細工やろう。昨夜は強風、豪雨だったので、大変だったろう？」

「声をかけてくれてありがとう。でも、まったく心配ご無用ですから。」

「この体勢じゃあ、竹竿を伝って雨が顎から臍へ流れ込んだらう。腹冷すぞ。どこかへ避難しろ！ この雨じゃあ、獲物は来ないつて」

「大きなお世話ですよ。命令しないでください。あなたの家来じゃないのだし。ご主人様が来なければいいのですよ。雨が降っているのに律儀ですね。足元が汚れると、奥さんに叱られますよ。」

三日目。

「おお、おお、いない！ 網がない。一本の糸が竹竿と雪柳を繋

ぐのみで、網がない。あの暴風だもんな。こんな網なんか、すつ飛ばされるよな。残った一本は命綱だな。きつと」

― 来ましたね、来ますよね、日課ですものね。でも、ご心配にはおよびません。また張り直しますから。残った一本は偶然、そうなったまでのことです。網を破られたり、飛ばされるのは、よくあることです。それよりも、どこから湧き出してくるのか、茄子の葉っぱに色の褪せたてんとう虫が数匹、ついてますよ。退治しなさいよ。こいつは手に取ると、その防衛反応でネバネバした黄色い体液を出しますし、臭い匂いもするはずですよ。上手に他のもので受けてから、退治することをお薦めします。掌に乗せちゃあ、だめですよ。

「また、てんとう虫がいるなあ。昨日も退治したのになあ。どこから出てくるのかねえ。どれ、やつつけてやる。このやろう」

― おお。はじめましたね。そうです。そうやって枯れた栗の葉に乗せて、そうです。うまいですね。慣れてますね。次に、敷石の上に落として、そうです。靴のつま先で、そうそうです。踏み潰すのです。そうです、そうすればいいのです。茄子を齧<sup>かじ</sup>られた悔し度が一〇〇%以上であれば、踏んだそのつま先を時計回りに半回転させてズリッと……そうです。ズリズリ攻撃です。今日は相当にご立腹のようです。足の動きを見れば分かります。それでいいのです。完璧です。そいつは二度と復活しないでしょう。後は真面目な蟻<sup>あき</sup>んこが処分してくれますからね。あまり美味くないので、私たちは口に入れませんしね。はい。もう帰ってください。退治しましたよね。もういけませんよ。この一瞬の晴れ間を使って網を張り直しますから。近くで仕事を視ていら

れると落ち着きませんので、どうかお帰りください。おっと！ 言わないこっちゃない。また降ってきたよ。

「雨か。また強くなってきた。じゃあなあ、蜘蛛よ。どこかに隠れてんだろ。元気だな」

― 声、かけてくれなくてもいいですから。ご自由にお帰りください。

四日目。

「よく降るなあ。こんな夏も珍しい。畑に水が溜ったままだ。蒸発しないからな。どれどれ、蜘蛛はいるか。蜘蛛くん！ おうおう、いた、いた。元気だったか？ この天気じゃあ、何にも喰ってないよな。ここ二日間、雨水ばかり飲んだのか？ ダイエットをしているわけじゃあるまいし、何か喰いたいよな」

― ああ、来たよ。来なくてもいいのに。来ちゃったよ。私に声、かけないで。大根、観て帰ってください。お願いですから。

「やはり、網は張れなかったようだ。蜘蛛も雨にはかなわないよな。蜘蛛って何も喰わずにどれくらい生きられるのかな。辛抱強いよな。蜘蛛よおう、聞こえるか？ まだ降るらしいぞ。おや、また、てんとう虫がついている。えい、懲らしめてやろう、退治してやろう」

― 退治したら帰ってくださいよ。雨の日は休業日だと決めているのですから。のんびり鋭気を養って、次なる戦略を考えたいのでね。

「じゃあ、帰るよ、蜘蛛よ。この変な天気はまだ続くようだから、くれぐれも気をつけろよ」

五日目。

「さて、今日はどうかかな？ 糸は一本のままか。蜘蛛！ 蜘蛛！ 蜘蛛くん！ いない、いないよ。どこ、どこだ！ 蜘蛛が雲隠れしたか？」

「探さないで！ 呼ばないで！ お願いします。放っておいてください！ 一人、いや一匹のままにしておいてくださいよ。蜘蛛が共同で獲物捕ってるところなんて、見たことないでしょ。私たちは一匹狼、いや一匹蜘蛛なのですから……」

「おうい、どこだ！ 蜘蛛くん！ おうおお！ いた、いた！ この厳つい顔、一度視たら忘れられない不細工な顔、親に文句の一つも言いたくなるような顔。親に責任を取ってもらいたい顔。ピーマンにきたか。そっかあ。飛んでくる虫がいなので、ピーマンの葉陰で雨をしのぐとともに、てんとう虫を狙っているんだな。うまい戦略だ。感心、感心！ あっぱれ、あっぱれ、蜘蛛くん」

「違うよ。何を、勝手に感心しているんですか。私は、てんとう虫は好物じゃあ、ありません。顔面に雨が当たるので、雨宿りをしているだけです。私に興味なんかもたないで、てんとう虫をやっつけて、早く、帰ってください。じろじろ視られると落ち着かないですから。」

「明日は曇り空になるそう。チャンスは明日だな。蜘蛛くん」

「蜘蛛くん、蜘蛛くんって、たやすく呼ばないでください。分かっていますよ。教えられなくても、すでに分かっています。人間よりも先に、そんなことは理解していますから。NHKで、お天気兄さんのアルバイトができるくらい正確に予測できますからね。それよりも、ご自分のことを心配しないですよ。何かあるでしょ。個人的な仕事や職場での会議やお子さんの進路のこととか、私を観察できるほど暇じゃないですよ。」

「さて、今日の観察はこれくらいにしておくか。蜘蛛くんも元氣そうだしな」

六日目。

「いない、いない、忽然と消えた。もう諦めたかなあ。こんな天候じゃあ、網なんか張る気力も湧いてこないよなあ。おまけにろくすっぽ喰ってないので、原糸を製造できないのだろうよ。残念、残念」

七日目。

「いない、いない」

八日目。

「やっぱり、いないなあ。まさかカラスに喰われたわけじゃないだろうな」

九日目。

「ようやく、晴れた。朝のうちに、残りの白株を抜いてしまおう。もう成長しないよな。秋だし。おっと！ おった！ おってすと！ い

た、いた！ うれしいなあ。久しぶりだなあ。動いているよ。動いてる！ 張ってんだ。場所を変えたんだ。ムクゲの小枝と枝豆を繋いだのか。南西方面に空間ができる位置じゃないか。顔に似合わず考えたなあ。脳ミソ使ったなあ。伊達に厳つい不細工な顔してるわけじゃないのだねえ。ムクゲの花には蜜蜂、蝶も来ているし、見事な戦略変更だよ。うん、おじさんは感動したぞ！」

— あーあ、あーあ。またお会いしましたね。お元気でしたか？ 感動されちゃったよ。白株ですか？ 早いこと抜いて、お帰りください。作業の邪魔ですから。ついでにこの際、言っておきますが顔でものごとを考えているわけではありませんので、今後、顔の話はしないでください。不細工という表現を四、五回聞きましたけど、はつきり言って気分悪いです。

「注文して悪いけど、もっと上手に張らないと図体の大きい蜜蜂だったら網を破っちゃうよ。相変わらず網目も広すぎるよ。これじゃあ小さな昆虫はスルーしちゃうな。天気は下り坂だから、早いことやってしまいなよ。不細工な厳つい面の蜘蛛くん」

— だから顔の話はしないでくださいってばあ。先祖代々、この顔です。から。ごついのですよ。また、親方のような口のきき方は止めてくださいよ。網張るのだって親兄弟にも教えてもらっていない独学なのです。から。本能ってやつですよ。急いで張ってしまいたいので、邪魔しないで、さあ用事がすめば帰った帰った。この一週間、ろくに喰ってませんのね。私の身にもなってくださいよ。もう限界に近いです。これ本当ですから。

「おお、来て見ろよ、啓人。そっちにいた蜘蛛が今朝、ここで網を張ってるよ。位置はいいけど、こいつ意外とトンマなんだ。張るのも上手じゃないし、こっちの端が枝豆なのよ。来週中には枝豆を収穫するので全部、抜いちゃうよ。そうすりゃ網が下から三分の一ほど縮んじゃうよ。なあ、トンマだろ。くも（蜘蛛・困った）ったもんだ。はあはあはあ」

「お父さん、昆虫は人間以上に賢いから大丈夫だよ。ちゃんと自然の摂理にしたがって生きているから。蜘蛛の脳は身体に占める容積がとて大きいんだよ。ハエ、蚊、ダニ、ゴキブリなどを捕食する蜘蛛もいて、人間にとっては益虫だよ。蜘蛛は大部分が肉食性でどの種も自分とほぼ同じ大きさの動物を捕食するよ。でもね、沖縄県にはツバメやシジュウカラを捕食するものもいるそうだね。花粉を食べるものもいるんだ。蜘蛛については、もっと驚くべきことが分かっているよ。それはねえ、フランスの研究者たちがコモリグモについて実験したのだけど、この蜘蛛を海水に沈めて溺死させた後、観察していると溺死後二時間くらいで蘇生する生命力があることを確認したんだよ。この蜘蛛は呼吸を必要としない代謝プロセスへ体を切り替えて生き残る術を身に付けているそうだね。恐るべき蜘蛛だよ。お父さんが観ている、その蜘蛛はまだ若いのもかもしれないね。手をだしちゃいけないよ。邪魔しちゃうじゃないよ。蜘蛛は賢いからね」

「そうか。『天文年鑑』を愛読書とする君が言うのだから、確かだろうなあ。あはっはっはっ」

「ねえ、お父さん知っている？ 蜘蛛が作る網の糸にはカイコの糸と同じように、たんぱく質が含まれているそうだよ」

「へえ、そうか。君は詳しいな。偉い偉い、偉いぞ」

「獲物を捕る網の張り方にも幾つかあってね、『投げ糸』といって、

これは投げ縄のようにして狩をするよ。それから「受信糸」を張って、それに触れた虫を捕らえたりするんだ。タンポポのように糸を風になびかせて飛んだりするものもある。なかには糸で空気室を作って水中で生活する蜘蛛もいるみたいだよ」

「なるほどね。いろんな蜘蛛がいるんだな。ところで一度、張ると網はどれくらい持ち堪えるのかなあ」

「網の大きさや蜘蛛の種類によって違うけど、破れなければほとんど新調しない蜘蛛もいれば、破れたところだけを直す蜘蛛もいるし、イエオニグモは毎日のように張り直すそうだね」

「そりゃあ、大変だな。でもこいつじゃないだろ。こいつの網が破けるのは強風のせいだからな、きつと。そんな几帳面な蜘蛛にはみえないし」

「でも、邪魔しなければ、大きさにもよるけど、十分ほどで完成するんだ。夜行性の蜘蛛なら昼間は網を張っておくとゴミが引つかかったり、鳥などに壊されることがあるので、朝になると片づける蜘蛛もいるそうだよ」

「何い！ 片づける？」

「糸を丸めて捨てたり、自分で食べたたり、次の網を張るときに再利用するんだよ」(この部分は「DO科学」「朝日新聞」朝刊、二〇一四年四月五日(土曜日)を参考にした。)

— そうです。俺はまだ若造なのよ。放っておいてくれよ。それに息子さんまで連れてくるなよなあ。視線が増えて恥ずかしいじゃないか。もう来ないでくれって！ でも、息子さんは俺のことをしっかり理解しているね。知識が豊かだねえ。賢いねえ。聞いたところによると、高校三年間一度も欠席せずに皆勤賞をもらい、さらに図書館の借り出し

冊数がベスト三に入るほど読書好きの息子さんだそうですね。感心！ 感心！ 末は博士か大臣にでもなれる器だねえ。しかしご主人様、『天文年鑑』と蜘蛛とは繋がらないと思いますけどねえ。

十日目。

「相当、激しく降ったけど、蜘蛛くんは大丈夫かな？ いないなあ。どこかに避難したのだろうか？ おっと、ここいたのか。ムクゲの葉の裏にへばりついているな。生きるって大変だよな。蜘蛛くん。また網は破られちゃったなあ。ゴミだけが引っ掛っているよ。ゴミを集めるのが趣味じゃないよな。ゴミ除けないとトンボ捕れないぞ。これを骨折り損のくたびれもうけ、と言うのだ。あはっはっはっ。ところで昨夜、じつくと考えたよ、お前のあだ名をな。けっこう、ドジだから、『破れ網、蜘蛛ノ助』

とすることに、決めたよ。以後、一切変更はないからな。種明かしをすれば、昔、TVの番組に『破れ傘 刀舟悪人狩り』という素浪人が悪人をやつける時代劇があつて、それをヒントにしたのよね。刀舟役は萬屋錦之介だったかなあ？ 錦之介は男前だけど、その不細工なお前の顔を視ていると、そんな風貌だけはあるよ。いいあだ名だろ。破れ網、蜘蛛ノ助くん。刀舟と同じようにしぶとく生き延びろよ。主役は死なない、って言うからよ。じゃあなあ、グッドラックだ！」

— とんでもない。あだ名なんかつけなくて下さいよ。友達じゃないのだから。それに偶然、オスの名前になったようですけど、メスだったらどうするつもりだったのですか。見分けられないでしょ。『破れ網』、何ですか？ まるで私が下手くそな職人のようじゃないですか。さらに『蜘蛛ノ助』はないでしょう。『助』だけは止めてくださいよ。

同じ助でも錦之介の「介」にしてくださいよ。どうせつけるのだつたら、せめて『蜘蛛くも隠才蔵かくさいぞう』か、何んかにしてくださいよ。お願いしますよ。

その前に蜘蛛に対して『生きるって大変だよな』はないでしょう。この言葉、そっくりご主人に、いや人間にお返ししますよ。私ら蜘蛛は節度を守り、自然の時間の流れの中で生きてますから、この浮世を大変だなんて考えたことありません。人間の方がよっぽど大変じゃないですか？ この夏の天候だって、異常気象と呼んでいるようですが、誰がこんな気象にしたのでしょうかねえ？ 反省したこと、ありますか？ 雨が多くて、畑の土が乾かないって愚痴る前に、なぜこんなに雨が降るようになったのか、よくよく考えてみましょうか？ 最近じゃあ、竜巻が頻繁に発生しているし、この地域でも雷が鳴るような気象になってしまったようです。これ、半分以上は人間の責任ですよ。問題点がはつきりしているのに行動を起こさない、これは人間の悪い習性ですね。

『人間は責任をとらない。蜘蛛は責任を取らなきゃならないようなこととはしない』。

蜘蛛をはじめ、昆虫たちはこの気象の変化に対応すべく生活リズム、体内時計、寿命すらも調整しているのですよ。さあ、もう、来ないでください。今日はてんとう虫を退治しないのですか？ くどいですが来ないでくださいよ。観ないでくださいよ。一匹だけでも生きていく自信はありますから。

ところで今朝は英語でべましたね。私を十分に観察し尽くしたってことですか？ まさかこんな私を主人公にして小説とかエッセイなんぞ書こうという気をおこさないでくださいよ。まだ下手で主役は張れませんから。くれぐれもお願ひしておきますよ。では、私も、いつの

日かシーユーアゲイン！

(了)

付記。その後、蜘蛛ノ助は私の前に現れることはなかった。死んではいないのだろう。まさに蜘蛛隠れしてしまったのだ。蜘蛛にとつても生き難い自然環境になってしまったようである。この北の大地でも積乱雲が立ち、頻繁に雷鳴が聞こえた夏だった。関東では竜巻被害も生じている。この蜘蛛観察は二週間ほど続けたが、本文では蜘蛛ノ助と会話ができた観察日だけを紹介した。この間、昼夜を問わず、雷鳴が起こり、豪雨が続く日が多く過ぎた。そのため、例年になく畑には昆虫が来なかった。いや来ることができなかった、と言うのが正しいだろう。蜘蛛ノ助が難儀したことは筆者がよく知っている。人間は、環境にもっと関心を持って、行動しなければ……と反省している。

